



Winter '11

Vol.

78

(社) 科学技術国際交流センター会報

www.jistec.or.jp

JISTEC Report

Japan International Science & Technology Exchange Center Quarterly Report

卷頭言

東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）の役割

Article 1

2010年 日中女性科学者北京シンポジウム開催報告

東アジア・アセアン経済研究センター (ERIA) の役割

JISTEC及びその会員の方々にはあまりなじみのないERIAについてご紹介します。

①ERIAの設立

「世界の成長センター」として活発な経済成長を続ける東アジア地域では、ASEANを中心に域内経済統合の動きが急速に発展しています。一方で、域内格差、気候変動・環境問題等の分野で様々な問題に直面しています。このような課題に対して、アジア全体で政策協調を進める上で中核となる機関が必要との認識の下、日本の提唱に基づき、2007年11月にシンガポールで開催された第3回東アジア首脳会議(EAS)において、アセアン加盟10カ国、日本、中国、韓国、インド、オーストラリア、ニュージーランドの首脳がERIAの設立に合意しました。翌年6月3日には、設立理事会がASEAN事務局(ジャカルタ)で開催され、現在、ERIAは、EAS等に参加する首脳等にアジア地域が有する課題について政策提言を行う独立した国際機関として、経済統合への取り組みを支えています。

②ERIAの活動(右図参考)

ERIAの研究活動は、①「経済統合の深化」②「経済格差の是正」③「持続的経済発展」を主要な3つの柱とし、貿易・投資促進、インフラ開発、産業開発、経済連携協定、イノベーション、エネルギー・環境問題等、多岐に渡っています。その成果に基づく政策提言は、EASやASEANサミット等に直接提出され、経済統合に向けた政策協調を促しています。2010年10月に開催された第17回ASEANサミット及び第5回EASでは、ハード・ソフトのインフラ整備、産業開発等を東アジアで一体的に進めるための戦略を示す「アジア総合開発計画」や、交通インフラ整備や制度的調和によりASEANをシームレスにつなげる「ASEANコネクティビティマスター・プラン」などへのERIAの貢献を、各国首脳が高く評価しました。

③ERIAと科学技術

経済統合を進めていく上で、成長力の源泉となるイノベーションを促進することは極めて重要です。また、経済



▲執筆者(右)と経済産業大臣 大畠章宏氏



▲2008年6月3日 設立理事会

にしむら・ひでとし

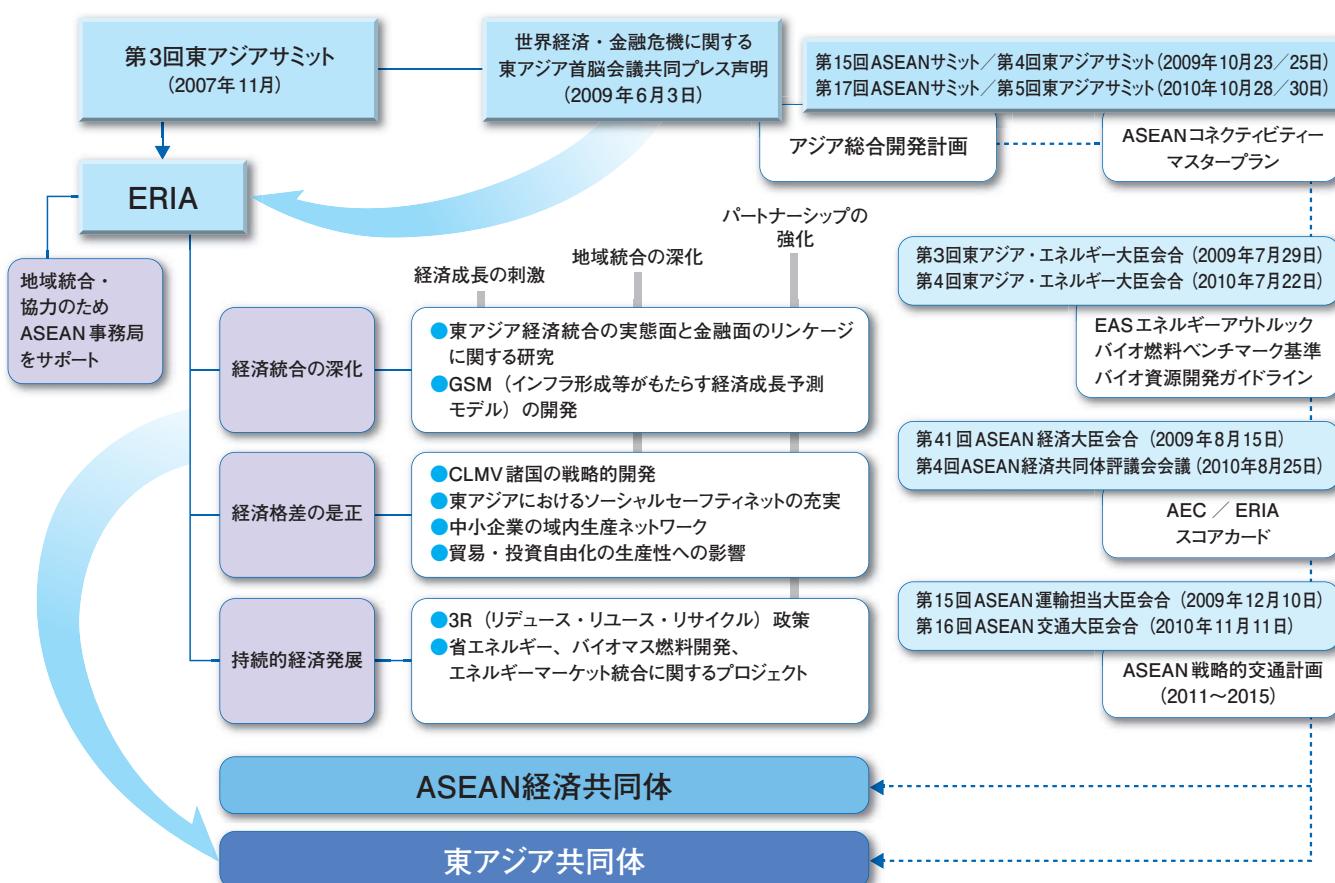
1952年大阪府大阪市生まれ。76年通産省入省。中小企業庁経営支援部長、日中経済協会専務理事をへてERIA発足に当たり初代事務総長。

成長を長期的に持続可能な形で進めていくためには、新たなテクノロジーを開発し、普及させていくことが必要です。ERIAは、その研究の中で、イノベーションの促進のための政策パッケージの在り方や、省エネルギー促進やバ

イオ燃料の標準化などについて政策提言を取りまとめています。

今後日本の科学技術関係機関とのさまざまな関係や交流ができれば幸いと考えています。

東アジアサミット・ASEANサミットからのERIAに対する政策研究の要請



Contents

JISTEC REPORT • 78



- | | |
|--|---|
| <p>02 巻頭言
東アジア・アセアン経済研究センター(ERIA)の役割
●ERIA事務総長／西村 英俊</p> <p>04 2010年 日中女性科学者北京シンポジウム開催報告
[報告] 東京本部 事業部 主事／工藤 裕子</p> <p>07 JISTEC NEWS
▶就任にあたり</p> | <p>08 科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)
第7回年次総会開催</p> <p>09 第3回Summer Institute
(韓国理工系大学院生研究交流事業)に参加して</p> <p>10 外国人研究者用宿舎／二の宮ハウス・竹園ハウス</p> <p>11 外国人研究者からのMessage
言葉の壁を越えて</p> |
|--|---|

2010年

日中女性科学者北京シンポジウム 開催報告

●報告：東京本部 事業部 主事／工藤 裕子

はじめに

2010年9月20日、21日に、中国は北京の中国科学院生物物理研究所において、社団法人日中協会および中国科学院主催による国際シンポジウム「2010年日中女性科学者北京シンポジウム 女性と科学技術－21世紀社会への提言」が開催され、JISTECは共催者として開催を支援しました（JISTECからは、岩崎健一理事及び工藤裕子主事が渡中し、これに同行しました）。

このシンポジウムは、1992年に日中国交回復20周年を記念して北京にて開かれたシンポジウムを始まりとし、第2回目は1998年に広州にて開催されています。そして2010年9月、



◀シンポジウム会場の様子
前列右端に、主催者である（社）日中協会の白西紳一郎理事長、その隣に訪中団副代表を務められた小館香椎子JST男女共同参画主監（日本女子大学名誉教授）。
二列目には幹事を務められた4名の先生方が並ぶ。左より佐々木裕子明治薬科大学客員研究員（環境・エネルギー科学技術分野・座長）、守屋朋子金沢工業大学客員教授（情報科学技術分野・座長）、長谷川知子いでんサポート・コンサルテーションオフィス代表（生命科学技術分野・座長）、堀内光子文京学院大学院外国语学研究科特別招聘教授（経済・社会科学分野・座長）



▲参加者全員による記念撮影

第3回目が初回開催地と同じ北京にて開かれることとなり、日本からは30名を超える訪中団が中国を訪れました。

顧間に山東昭子参議院議員

1992年の初回開催時より、山東昭子参議院議員には訪中団代表として本シンポジウムにご参加いただいていましたが、今回の開催においても、日本側参加者のみならず（今回のシンポジウムに参加した女性科学者の内、約3分の1が前回のシンポジウムの参加経験者）、中国科学院からの出席要望を受け、山東議員に訪中団顧問を務めていただくことになりました。

山東議員におかれては科学技術分野の国際交流と中国の研究施設等の視察調査を兼ね、シンポジウム会場のみならず上海にも飛んでいただき、本シンポジウムの中国側主催者である中国科学院の上海応用物理研究所が上海市政府と共同投資のもと建設した中国最大の放射光施設「上海光源」や国家重点大学として指定されている理工系大学（同済大学）等、中国の研究環境の現状を視察調査いただきました。

日中の女性科学者が 一同に会して

シンポジウムは2日間に渡り開催されました。初日の基調講演には日本から1名ずつが登壇し、日本からは毎日新聞社の青野由利論説委員が「科学技術の未来予測」と題し、およそ100年前の1901年に報知新聞に掲載された「二十世紀の予言」の具体例などを取り上げつつ、科学技術の予測とその実現、予測調査の意義について講演がありました（文部科学省「科学技術白書（2005年版）」に、「二十世紀の予言」として取り上げられた科学技術の予測－“無線電信及電話”

=携帯電話、“暑寒知らず”=エアコン－等について判定した興味深いコラムが掲載されています）。中国からの基調講演では中国科学院計画戦略局の張鳳副局长より「科学技術ロードマップの研究および革新2050」と題し、戦略ツールとしての“革新2050ロードマップ”的特徴や中国における今後50年の戦略体系などについて

紹介がありました。

初日の午後からは4分科会－①環境・エネルギー科学技術分野、②情報科学技術分野、③生命科学技術分野、④経済・社会科学分野－が開かれ、分野毎に両国から女性科学者6～7名ずつが2日間に渡りテーブルを囲み、自身の専門研究についての発表を行いました。同分野といえど

▶ 前列左より訪中団代表を務められた大島美恵子日本科学协会会长、程東紅中国科学技術协会書記處書記、訪中団顧問・山東昭子参議院議員、方新中国科学院副書記、張鳳中国科学院企画戦略局副局长、訪中団相談役の沖村憲樹JST顧問、二列目左端にJISTEC岩崎健一理事



▶ 上海光源 大型放射光施設 実物縮小模型



▶ 基調講演に登壇する青野由利毎日新聞社論説委員



も、参加者の専門研究はそれぞれ違うことから、日中関わらずその内容に深く聞き入り、活発な質疑応答を通して盛んな研究交流が広げられて

いました。また、女性科学者に限定したシンポジウムとして、就労環境や家庭との両立について、日中双方の現況について話し合う機会も見ら

れ、文化的背景による捉え方や環境等の違いはあるものの共感し合うところも多く、友好的な雰囲気の中、議論を通して国際交流が進みました。

【分科会別発表テーマ】

▼日本側	▼中国側
①環境・エネルギー科学技術分野	
<ul style="list-style-type: none"> ●緑のダムと水源保全 ●21世紀の天然ゴム ●ビール醸造残渣からのバイオ水素生産技術の開発 ●宇宙機構へのスペースデブリ衝突に関する研究 ●高速増殖原型炉 もんじゅ の性能試験について ●プレート境界巨大地震のアスペリティ 	<ul style="list-style-type: none"> ●中低温ソーラーエネルギーの間接レベルアップ及びシステム集成 ●バイオマスエネルギー・熱の利用技術の研究及び応用 ●技術進歩と国際協力による気候変動への低減に関する研究 ●マルチソースリモートセンシングデータによる 森林構造パラメータ採取についての研究 ●生態回復について（半干ばつ地域に対する一部の研究成果の紹介）
②情報科学技術分野	
<ul style="list-style-type: none"> ●つなぐ・つながる・ひらく・ひろがる（遠距離通信高速化について） ●The m17n lib マルチリンガル文書処理ライブラリ ●研修ビジネスにおける効果測定のあり方 ●放送サービスと個人向け通信サービスとの連携について ●光相関演算による高速動画識別システム 	<ul style="list-style-type: none"> ●モバイルインターネット：ネットワークの構成及びコア技術 ●中国科学院（CAS）スーパーコンピューティングの環境構築及び 応用について ●中国科学技術ウェブサイト（CSTNET）について ●モバイルコンピューティングとユビキタスコンピューティングにおける データープロセス ●システムセキュリティにおける斬新な研究領域 —コンピュータフォレンジックについて ●グラフィックスプロセッサに基づくパラレルデータマイニング技術に に関する研究
③生命科学技術分野	
<ul style="list-style-type: none"> ●脳の性差を考える—男女協働参画を科学する— ●日本における出産環境と施策の変遷 ●食品からの汚染物摂取量について ●女性医師再教育の取り組み ●医薬品開発におけるバイオアナリシス 	<ul style="list-style-type: none"> ●疱疹ウィルスの包膜における間質タンパク質の役割 ●中国科学院微生物株保存情報システムについて ●人体聽覚皮質におけるマルチセンサリスピーチのダイナミックな表象 ●子瘤前症発祥メカニズムについての研究 ●児童社会行為の発展について—公平行為を例にして ●血糖のコントロールにおける小胞体の輸送と融合について
④経済・社会科学分野	
<ul style="list-style-type: none"> ●中国における女性関連市場の成熟と日系企業 ●市民のための科学技術 ●宅配便エコポイントによる消費者へのアプローチについて ●水の意識調査にみる生活者視点での水問題解決の方向 ●日本の科学技術分野およびJSTにおける男女共同参画の取組 —イノベーションの創出へ向けて— 	<ul style="list-style-type: none"> ●中国の経済発展及び教育が直面しているチャレンジ ●Input-holding-output技術と対外貿易 ●定性メタ合成サポート技術及びその応用 ●コーポレートバイオニックスについての研究 ●チャンス・信頼・努力—国際協力と社会心理学の研究 (北京オリンピックによる人々の心理への影響) ●中国の都市化及び都市地理学の研究



◀分科会風景
(左上)
環境・エネルギー科学技術分野
(左下)
情報科学技術分野
(右上)
生命科学技術分野
(右下)
経済・社会科学分野

このシンポジウムで特徴的なのは、閉会式の司会が日中の参加者の中で一番若い人に任せされることです。女性研究者より良い未来環境へ向けた期待への表れとして、2人の若手が壇上へ上がり、進行を務めます。初々しいながらもしっかりと役割をこなす勇姿に、未来への期待を寄せた参加者は少なくないことでしょう。

閉会式では日本側副代表である小館香椎子・科学技術振興機構男女共同参画主監が女性研究者の比率や活躍など、具体的な数値を紹介しながら会議の全体総括を行った後、日本側代表の大島美恵子・日本科学協会会长が閉会の辞を述べ、大きな拍手をもってシンポジウムは幕を閉じました。

内外の研究交流を通して

シンポジウムの翌日は、清華大学を訪問し、Department of Environmental Science & Engineeringの研究施設を

見学しました。今回の日本側参加者の中には前回（1998年）の広州シンポジウムに参加した者が約10名含まれていましたが、この12年の間に中国の研究環境と研究内容が飛躍的に進んでいることに率直な驚きを覚えていたようです。中国の経済的発展も大きな要因の一つと考えられますが、大きく進化したインターネット環境によるバーチャルなグローバライゼーションによる情報の取得も作用しているであろうと推察されます。

また、交流という意味においては、日中間のみならず、日本人参加者間での交流も貴重な経験となったようです。通常は自分の属する専門分野においてのみの交流となりがちなところを、参加日程となる5日間を異分野の研究者らと過ごし、情報交換を通して、異分野横断的なネットワークが広がったことが非常に有意義であったとの声が多く聞かれ、この成果を今後の発展につなげるためにも、同様のシンポジウム

を是非また開催してほしいとの要望を北京滞在中から寄せられたほどです。参加メンバーは公的研究機関に所属する者から大学関係者、民間企業、フリーランスと幅広く、また、年齢層も駆け出しの20代からベテランの60代までが一同に会したところで、それぞれの研究環境や現在に至るまでの道程や経験談について、移動のバスの中でも話の絶えることがありませんでした。

本シンポジウムは、日中女性科学者の人材交流を通して、両国の相互理解促進とより良い研究環境の整備へ向けて提言、また、後進の育成に繋げていくことを期待し開催されたものです。これについて、芦田基金運営事業の趣旨「広く一般の科学技術分野での人材交流事業に資する」に合致することから、芦田基金の助成を受け、具体的な運営の支援が可能となりました。ご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。



1 就任にあたり

●社団法人科学技術国際交流センター 専務理事／國谷 実

平成22年6月より科学技術国際交流センター（JISTEC）の専務理事に就任した國谷でございます。科学技術の国際化は現在の我が国にとって大きな課題となっております。このような時期にこの分野で重要な使命を果たすJISTECの仕事に従事させていただくことは大変な名誉と存じております。

しかしながら、我が国の科学技術の国際化にもいくつかの問題が横たわっております。一つは、一時、頭脳流出が心配されたほど外国への若い研究者が野心的な場を求めて進出していったのですが、近年、若手研究者の海外への派遣が少なくなっています。学会への参加などは着実に増えているのですが、長期的な研究派遣などはむしろ減少傾向にあります。これが我が国研究者の内向きな態度につながってゆくのではないかと危惧されています。最近多くの日本人ノーベル賞受賞者を輩出して居りますが、これらの受賞者の多くは若くから海外での活動によりその成果が認められてまいりました。特にこれから研究を支える若手の積極的な

海外での活躍が期待されるのです。もうひとつは、優れた研究設備や環境が整備されるにつれて海外からの研究者を招くことが増えており、優れた研究者が我が国で研究していただけることは日本のポテンシャルを上げる上でも非常に望ましいこととなっております。しかし、こうした外国人研究者を受け入れるには日本ではまだ十分な環境整備が進んでおりません。特に研究者やその家族の生活支援は残念ながら政府の調査でもまだまだ低いと言わざるをえません。

JISTECが創設されて昨年で20年を迎えたのですが、諸先輩や会員の皆様のご支援、職員の努力により科学技術の国際化が広く認識されたのは間違いありませんが、これからは以上に掲げた具体化した問題の解決にお互い知恵を出して解決してゆかねばならないと思います。どうか新しい10年に向けて今までに倍する御支援とご協力をいただきますようお願い申し上げます。



2 「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム (STSフォーラム) 第7回年次総会開催」



▲開会式で挨拶する尾身幸次チアマン

「科学技術の光と影」をテーマとするSTSフォーラムの第7回年次総会が、平成22年10月3日（日）から5日（火）まで国立京都国際会館で開催されました。開会式では尾身幸次チアマンが挨拶し、続いて、海江田万里内閣府特命担当大臣（経済財政政策、科学技術政策）、西田厚総日本経団連副会長、ブリトビラージ・チャパンインド科学技術相等の基調講演が行われました。

90の国・地域、10国際機関から約800名の科学者・研究者、政策立案者、ビジネスマン、オピニオン・リーダーが一堂に会して、科学技術と人類の未来について議論、意見交換が行われました。

閉会式では、「今、我々がしなければならないこと」について提起され、ステートメントが採択されました。

<主催>特定非営利活動法人STSフォーラム

<共催>科学技術国際交流センター（JISTEC）

<後援>内閣府、文部科学省、外務省、経済産業省、日本学術会議、(社)日本経済団体連合会、(独)科学技術振興機構、(独)産業技術総合研究所、(独)日本貿易振興機構

<フォーラム・スケジュール>

●第1日

10:00 開会式 [Science and Technology and the Future of Humankind]

11:00 全体会合 [Innovation as Driver for Economic Growth]

13:30 全体会合 [Investing in Science and Technology for Building the Future - Dialogue among Political Leaders, Scientists and Industrialists]

16:00 分科会第1シリーズ

○化石エネルギーの将来

○オーダーメイド医療とナノ医療の最前線

○情報通信技術（ICT）の新たな展開

○21世紀の科学・工学教育

○生物多様性の維持

○居住環境の発展：都市問題

○科学技術外交と国際協力

19:00 オフィシャル・ディナー

●第2日

08:30 全体会合 [Science and Technology for Global Health]

10:20 分科会第2シリーズ

○再生可能エネルギーの課題と解決策

○老化の科学

○情報通信技術（ICT）が可能にするビジネスと社会の変容

○産学官連携

○森林の維持

○居住環境の発展：水問題

○科学技術におけるメディアの役割と関連問題

12:30 ワーキング・ランチ [Building a Post-Kyoto Protocol World]

14:20 分科会第3シリーズ

○原子力エネルギーというオプション

○感染症対策のための新しい国際的なシステム

○情報通信技術（ICT）時代のセキュリティー

○21世紀に向けて変容する大学

○海洋の維持

○居住環境の発展：気候変動への適応

○社会における科学技術についての若手科学者からの視点

16:50 全体会合 [A: Impacts of ICT on Economy, Society and Quality of Life]
[B: Food, Nutrition and Population]

18:30 スペシャル・ビュッフェ・ディナー
[於 清水寺]

●第3日

08:30 全体会合 [各分科会からの要約]

09:25 Participants' Open Session

10:45 全体会合 [Energy for Future]

11:45 全体会合 [What We Should Do Now]

12:30 フェアウェル・ビュッフェ・ランチ

なお、詳細については下記URLにアクセスして下さい。

URL:<http://www.stsforum.org>

ステートメント、プレスリリース等掲載されています。

また、Webcastで開会式・閉会式及び全体会合のビデオをご覧いただくことができます。



分科会での論議

3

第3回 Summer Institute (韓国理工系大学院生研究交流事業)に参加して

●九州大学大学院／上田 武 (ホスト研究機関名：韓国科学技術研究院 認知ロボットセンター)

①応募したきっかけ

社会に出て働く前に、海外留学を経験しておきたかったというのが一番の理由です。当初、私は多くの友人知人が留学する中で、日本で、日本語で勉強するほうが効率が良いし、寂しい思いもしないと考えていました。ただ、経験せずに批判するのは良くないので、実際に自分の目で見て考えたいと思っていました。そして、多少の甘えが許されるという点で、学生の間に行っておきたかったのです。そのような背景で夏季短期留学プログラムを探しているとき、本プログラムを知りました。本プログラムは、語学だけではなく、研究、しかも産業技術に関連した研究ができるという点で、私にとってとても魅力的でした。韓国という国にも興味がありましたし、金銭面での手厚い補助もあり、早速応募しました。

②事前準備

選考合格後、ホスト研究者とメールで連絡をとり、研究内容や日常業務、研究研修初日のスケジュールなどについて打ち合わせました。研究内容に関しては、概略を聞いたのみで、実際に行う研究は着いてから決めようということになりました。英語は試験を受けたり外国人と話したりしながら、今までより意識的に勉強しました。韓国語は入門書を購入し読みましたが、そのときは途中で挫折しました。あとはJISTECより案内のあったNHK日本の、これから「日韓」の座談会に参加することで、日韓の歴史や企業の在り方、今後の関係などについて学びました。

③研究研修について

私の行ったところは研究所でしたが、近隣の大学と連携しており多くの学生がいました。年齢層も幅広く、また多くの短期の学生や外国人がおり刺激的でした。会話はほぼ英語で行い、時折日本語、韓国語を教え、教わりありました。週に1度行うサッカーは大きな楽しみでした。

研究は、私の日本での研究に関連する屋内移動ロボットの自律移動に関するものを行いました。ホスト研究所では、開発中の移動ロボットがある研究グループに所属しました。移動ロボットのための地図生成アルゴリズム、探索アルゴリズム、自律移動アルゴリズムを開発し、実装しました。

④この研修を通じて得たもの

まず、内容がどうあれ経験することができて良かったと思います。海外で勉強することの良さ、悪さについて自分なりに考えました。また、自分が不便な立場にある中での韓国人の親切さにふれ、私ももっと優しくなるという気持ちになりました。さらに研究に関しても、現地の学生や研究者の方々と多くの議論を行い、良い成果を残すことができました。公私ともに今後も継続する関係を築けたと思っています。最後に、ハングルの読み方と多少の韓国語を覚えました。



▲ホスト研究所のメンバーと使用したロボット

⑤参加する人へのアドバイス

私の場合は、応募の段階でホスト研究室とのコネクションはありませんでした。そんな中で連絡を取って頂いた運営の方々にはとても感謝しています。そのため、研究室に行く前は、正直邪魔者なのではないかと心配していたのですが、研究所の方に韓国的学生にとってもいい経験になると言っていただき、安心したのを覚えています。

日本文化、特にアニメやゲームをよく知っていると、人気者になれるかもしれません。当初の私の予想以上に、これらは世界に進出しているようです。韓国の人もそこで覚えた日本語をよく話していました。最後に、なれない環境からくる疲労に加え、夏でも気温が下がったりすることがあるので、体調管理には気をつけましょう。

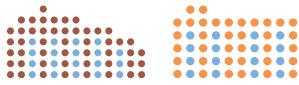


▲週に1度のサッカー



▲韓国、大田のエキスポ科学公園にて

- 委託：日韓文化交流基金
- 主催：日韓産業技術協力財団
- 運営：韓日産業・技術協力財団
- 企画：JISTEC



外国人研究者用宿舎 | 二の宮ハウス・竹園ハウス

■居住者からの発信

Carol J. Hall

キャロル・ホール

●アメリカ出身。

気象研究所勤務William D. Hall博士の妻

ここ3年ほど何度か続けて日本に訪れていますが、嬉しいことに主人の受入研究員はいつも二の宮ハウスの部屋を用意してくれています。アメリカのコロラドの家を早朝に発ち、長旅の末、疲れ果てて日本に到着する私たちにとって、ぐっすり眠れる清潔で快適なベッド、そして目が覚めたら新しい生活をすぐに始められる部屋が自分たちを待っていると思うと、とてもホッとしています。

私たちは本当に二の宮ハウスの部屋が気に入っています。アメリカ人にとって、ウォシュレットがついた日本のトイレや、お湯の温度を自在に調節できるお風呂、そして自動で火が消えるガスコンロなどのテクノロジーの数々は素晴らしいものに思えます。私は毎朝、「今日はどんな一日になるのかしら?」と、ベランダのカーテンを開けるのが本当に楽しみです。主人のビルは書斎机を気に入っていますし、私は同じ部屋でソファに丸くなってテレビを見たり、本を読んだり、手芸をするのが大好きです。こここの立地や自転車を借りられる便利さにも満足しています。

最近、二の宮ハウスが主催するバスツアーに参加しました。まず東京タワーの展望台に上りましたが、以前から聞いていた通り一度は見に行くべき所だと思うような素晴らしい景色でした。次に様々な建物が移築された小さい村のような江戸東京たてもの園に行きました。そこでは名物の武蔵野うどんも食べました。(写真参照)『千と千尋の神隠し』の監督がたてもの園の一部を映画に用いたことは本当に面白く、日



▲ツリーに手作りクッキーを飾る居住者



▲江戸東京たてもの園のうどん屋にて、笑顔のHallご夫妻

本のことより深く学ぶ機会を持てたことを嬉しく思いました。最後に谷中銀座へ行きました。そこでは若い頃本で読み、日本中どこでも手に入ると思っていたながらなかなか見つけることができなかったコオロギの籠をついに買うことができました。その店には、100年も前に作られたというとても素敵なかつら竹製の籠もありました。とても高価で買うことはできませんでしたが、実物を目についただけでも貴重な体験になりました。

その他の宿舎提供のイベントもとても有意義です。特に、美しくも難解な言語である日本語が学べるクラスでは、他の参加者と知り合うきっかけにもなり、二の宮ハウスを小さな村というような印象を抱くようになりました。「デスパレート・ハウスワイフ」という居住者が週1回料理を持ち寄って集まるパーティーにも参加しています。世界中の人々と知り合えることも、ここに滞在する利点の一つです。

昨年の冬、スタッフからエントランスのツリーに飾るクッキー作りのクラス講師を頼まれました。スタッフはとても親切に、材料を買うのを手伝ってくれました(食料品売り場は未だに難関です)。まずは全てのクッキーを焼き、その後参加者みんなで飾り付けをしましたが、非常に楽しく忘れ難い思い出になりました。このような機会をいただけたことに感謝をしています。

大事なことを言い忘れていましたが、二の宮ハウスのスタッフはいつも親切です。漢字に関する質問や何かを買うのにどこに行けばいいかを尋ねると、事務室の誰かしらがいつも親切に助けてくれます。最近間違って警報を鳴らしてしまった時も駆け付けてくれて、私の失敗を責めたりはしませんでした。

私たちはこのような二の宮ハウスが大好きで、またここに滞在できるのであれば、いつでも大喜びで戻ってきます。



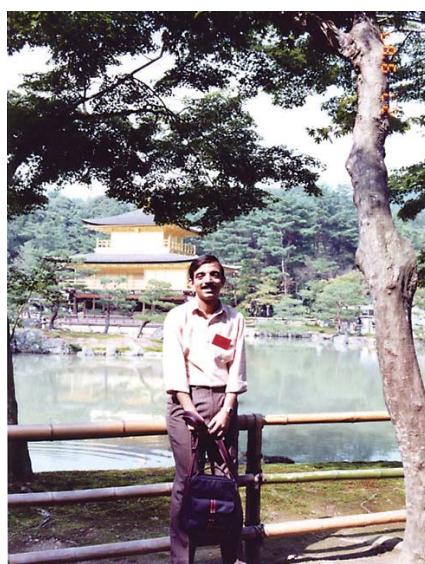
スニル・カウル Sunil Kaul

India

●1987年デリー大学（インド）で理学博士号取得。1989年に、STAフェローシップ制度の研究員として、工業技術院微生物工業技術研究所（現産業技術総合研究所）で2年間研究に従事する。その後、同研究所バイオメディカル研究部門の常任研究員となる。2001年からは小児医療研究所（オーストラリア）の客員主任研究員、2010年からはヨンセイ大学（韓国）の客員教授も務める。

言葉の壁を越えて

ヒマラヤ山脈の麓ダージリン地方のカリンポンという町で生まれ育った私は、インドのデリー大学を卒業後、科学技術庁（STA）のSTAフェローシップ制度^{*1)}の研究員（博士号取得者研究員）として来日しました。1989年4月27日の夕刻、成田国際空港に到着して、つくばまでの道のりは忘れられない体験です。空港に到着した私は、まず手持ちの現金を日本円に両替しました。その頃、クレジットカードはあまり一般的ではなく、パーソナル・チェックなど誰も知りもしません。両替後にバス乗り場に向かったのですが、筑波研究学園都市行きの直行バスはありません。その地名さえあまり知られていない様子でした。そこでとにかく世界に名だたる大都市・東京へ出て、そこから高速バスでつくばへ向かうしかありません。手持ちの50米ドルで両替できたのはわずか7,500円です。そのうちバス代に3,800円を使ってしまいました。東京からつくばまでのバスには、私以外に乗客一人と運転手一人だけで、驚きとともに非常に不安になりました。博士号取得後の研究の場として、ここで良かったのだろうか、と。時計はもう夜の11時30分をまわっており、外は冷たい雨という最悪な天気でした。バスを降りた私を待っていたのは、えも言われぬ静肅。



さあどうしたものかと考えているところへ、一台の車が突然私の前に止りました。私の受入研究者が、親切にも素晴らしいタイミングで迎えに来てくれたのです。どれほど

◀金閣寺の前で

ホッとしたことでしょう！

翌日から私の研究者としての日々はスタートしましたが、すぐにつくばは住んでみたい場所だと感じるようになりました。つくばは緑豊かでのどかな土地に研究教育機関が豊富にあり、緻密に計画された街です。ここで家具付きの住居^{*2)}を用意していただき、科学技術国際交流センター（JISTEC）の言語サポート^{*3)}により素晴らしいスタートを切ることができました。今でもそう思っていますが、日本語は少しずつ習得できるだろうと思いました。つくばにいた外国人は15名ほどでした。週末に集まって各国の食べ物を楽しみ、日本での日々の生活や仕事での体験を語り合うにはちょうど良い数でした。その多くは、異国の文化や食生活、人との交流などに戸惑いを感じていました。その頃の私にとっては、歓迎パーティーで豚肉やゆでた蟹が出たというのが、何よりも驚いた経験でした。その他にも共同風呂、「外人」と呼ばれること、研究室の静けさ、夜の足音に苦情を言う隣人など、様々なカルチャーショックがあったのです。間もなくして、文化研修旅行やその他の活動（茶道、生け花、料理、互いの言語を学ぶ交流会）にも参加できる機会がありました。私が最初に参加したJISTEC主催の京都・奈良そして日光旅行は、いまでも鮮明に覚えています。私は結婚を決意し、幸運にも妻がすぐに一緒に暮らしてくれることになり、一年が経つのはあつという間でした。私たちは主なレクリエーションであり趣味として有酸素運動と武術を続けていますが、二人とも思っていた以上に仕事が忙しくなり、人とのお付き合いの時間は少なくなり始めました。必要とされる研究を満たそうと努力して行くうちに、私たちは二人とも徐々に熱中し、研究のとりこになっていったのです。仕事が軌道に乗



▲執筆者



ると、常に非常に親切な周囲の同僚たちのお陰もあって、言葉の壁は無くなりました。また、JISTECの支援制度も常に受けることができました。科学技術庁(STA)・日本学術振興会(JSPS)をはじめとする日本の博士研究員制度において、JISTECは欠くことのできない存在であると思っています。一方では、来日してから10年の歳月が過ぎた頃には、言葉が話せなくとも活動できると感じるようになりました。特に社会システムが十分に確立されている日本ではそう言えます。誰もが同じで、わざわざ個別に解決策をみつける必要はありません。システムに従えば良いのです。これは旅行、買い物、賃貸、病院などの私の経験でもそうでした。



▲元JISTECスタッフ矢野さんと

(STAフェローシップ)研究員の任務を終えた私は、工業技術院(AIST、現産業技術総合研究所)の常任研

究員となることができ、ずっと日本に住もうと決めました。ただ今でも「日本食は食べられますか?」「お国にはいつ帰るのですか?」「なぜそんなに長く日本に滞在できるのですか?」などといった質問からは逃れられませんが。今ではJSPSなどの特別研究

員を受入れる側であり、博士課程研究員の監督者として、私は学生たちと自身の経験を分かち、また日本では外国人というものがどんなに特別な存在かを語っています。日本のことを深く感じ取り、知るためにには、言葉で学ぶのではなく経験することが必要です。そしてそのための最良の方法は、ものごとを日本のやり方で進めるということでしょう。交通システムなど日常生活の中での時間の正確さ、職場の規律、ビジネスにおける勤勉さと誠実さ、日本の桜の美しさ、食べ物の新鮮さなど、今でも感嘆させられます。私の家族もこれら全てを愛し、言語の壁のあるなしにかかわらず、日本での生活を楽しんでいます。



▲京都の日本土産店前にて

<注>

※1) 科学技術庁(現文部科学省)が1988年に、外国の研究者に我が国の研究機関において研究活動を行う機会を提供し、我が国の研究環境を国際化することを目的として創設した制度。2001年に日本学術振興会の外国人特別研究員事業及び外国人招へい研究者事業に移管された。JISTECは、いずれの事業においても外国人研究者受け入れの窓口業務、生活支援業務などを担当した。

※2) JISTECは、STAフェローシップ制度で来日した外国人研究者に対し、民間住宅を借り上げて、家具・家電製品を備えた上で、貸与していた。

※3) JISTECは、つくば地区のSTAフェローシップ制度により来日した研究者及びそのご家族に対し、場所を提供し日本語研修を実施していた。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。本年が皆さまにとって素晴らしい年になりますよう、心より祈念いたします。さて昨年11月あたま、「日経トレンディ」が選ぶ「2010年ヒット商品ベスト30」が発表されました。2009年は安い商品がランキングの中心でしたが、2010年は安さを売りにした商品は入っておらず、「食べるラー油」や「プレミアムロールケーキ」など「プチ贅沢商品」がランキングの中心に。消費者の間に節約疲れがあったことがヒットの要因だったようです。ガマンばかりの毎日では気分も暗くなってしまいがち。たまのプチ贅沢でリッチな気分になることも必要ですよね。2011年はどんな年になって、なにがヒットするのか楽しみです。

(M)